

2021年横浜ナザレン教会・復活祭礼拝  
「信じる者となる」ヨハネ福音書20：24～31

【聖書】

ヨハネ福音書 20:24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」30 このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。31 これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

1 礼拝で死を覚える

今日は、復活祭、イースター、イエス・キリストが十字架に架かって三日の後に甦られたことを喜び祝う日です。教会の礼拝が日曜日にささげられるのも、主イエスが日曜日の朝、甦られたから。毎週日曜日、教会は、この主の甦りを思い起こして、喜び神に感謝し、神を崇めて礼拝しています。つまり、教会は、一年間に52回か53回、復活祭を祝っていることになります。

その礼拝について、ある方がこう言いました。「主の甦りを思い起こす礼拝で神のみ前に謙るとき、自分がいつかは死すべき者であり、この世界もいつかは滅びるという事を繰り返し思い出す」。確かにそうです。礼拝で、永遠の御神を想い、額くように心を低くして祈る時に、自分の真実の姿が見えて来る、永遠には生きる事のできない小ささ、儂さに気付かされる、そういう時があります。自分だけではなく、私達が目で見、手で触る事ができるもの全て、人も人が造ったものも自然も過ぎ去っていくのだ、と思わされます。私達が「これは確かで変わる筈がない」と信じて生活しているものの殆どは、あっけなく崩れ去る。新型コロナウイルス感染爆発が、私達が確かだと信じていた社会の脆さを見事に露呈しました。

ですが、本来、自分の死や滅びを思う事は、たまらなく怖いことです。母に聞いた話ですが、私は、幼稚園の時、祖父の葬儀で茶毘に付された遺骨を見てから数日間、一言も喋らなくなったそうです。自分が喋れなくなったという記憶はありませんが、「おじいちゃんと同じに私も死んで焼かれて骨になるんだ」と知った時の恐怖、足元の底が抜けて闇に

落ちていくような感覚は、今も体の中に残っています。私だけではない、普段気づかなくても死への恐怖は、誰の中にもあるものでしょう。

しかし、クリスチャンは知っています。確かに死はとんでもなく怖い、しかし、死の恐れを超える希望がある、という事を。死はもう私達にとって最終的な回答ではなくなったのです。イエス・キリストが甦って、弟子たちと会ってくださったから、疑い惑うトマスにも会ってくださったから、私達は死を超える希望を持つことができます。2021年のイースターの朝、天の御神が愛して礼拝へと招いてくださった方々と共に2000年前、弟子たちと甦りの主イエスの出会いの様子、特にトマスとの出会いの様子を見ていきたいと思えます。

## 2 甦りの主

主イエスは十字架に死に葬られ、三日目に甦られた日曜日の朝、ただ一人、マグダラのマリアという女の弟子の前に現れます。そして、その日の夕方、家中の戸に鍵をかけて閉じこもっている弟子たちの真ん中に現れます。鍵をかけて閉じこもるとは、この時の弟子たちの心をよく表しています。イエスは、ローマ帝国への反乱を企てたという無実の罪を、ユダヤの指導者達にでっちあげられ、ローマ軍の手で十字架に惨殺されました。ローマ帝国は、反乱を企てる者たちに容赦しません。弟子たちも謀反人の仲間となれば主とおなじ目に会いかねません。彼らは死への恐怖に慄き震え、誰も入ってこないように、鍵をかけ閉じこもっていました。滅びる危機に直面した時、惑い混乱し心を閉ざす私達人間の姿をよく表しています。私達は、滅びを目の前にしたら、絶望するしかありません、希望などとても持てはしません。死への恐怖で心と体を固く閉ざすのです。弟子たちもそうでした。

しかし、甦りの主イエスはそんな弟子たちの真ん中に現れてくださいました。そして、「あなたがたに平和があるように」と言ってくくださったのです。これは、シャロームという言葉で、「こんにちは」というような日常的な挨拶であったようです。主イエスが弟子たちと共にいた時、幾度となく交わした挨拶でありました、弟子たちは、主イエスの挨拶する声を、その調子を知っていた筈です。だから、彼らは、この挨拶の言葉を聞いた時、今ここに忽然と現れた者は、自分たちを親しく導いてくれたイエス先生だ！十字架の死から甦ったのだ、と知ることができたのです。

イエス・キリストの甦りは、私達を見えない力で支配する「死」が討ち滅ぼされた、という知らせです。私達が生きる世界は、いつかは誰もが死ぬ事が前提の世界です。いわば、死に支配された世界。しかし、普段はそんな事、私達は考えてもみません。巧みな支配者は、支配している者にその支配を気づかせない、といえますから、死というのは、最も巧みな支配者です。皆、明日も明後日も生きる事を疑っていません。そして突如不意打ちを食らわすかのごとく、私達に襲い掛かります。死は、被造物である人間の避けられない宿命でありました。

ですが、イエス・キリストが甦ってくださった事によって、私達の死すべき宿命が打ち

破られた、と聖書は語ります。主は、再び死ぬ命に蘇生したのではなく、永遠の命に甦られた、そして、私達人間にも甦りの命への道を開いてくださったからです。「死が滅ぼされた」それがイースターに人類に伝えられたよき知らせです。

### 3 トマスの疑い

さて、今日、ここに出てきますトマスという人は、主イエスが選んだ十二人の弟子の一人です。ヨハネによる福音書によれば、彼は、正直で勇気ある誠実な人のようです。例えばこんな事がありました。主イエスが、エルサレムの指導者達から付け狙われるようになった時のことです。イエスは、愛する一人の弟子の為に「エルサレムの近くの村に行く」と仰います。弟子たちの多くが「エルサレムのユダヤの人々は、ついこの前もあなたを石で撃ち殺そうとしたのではないですか。またそこへ行こうというのですか」と反対しました。しかし、トマスだけは、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と仲間呼びかけます。また、こういう事もありました。主イエスは、逮捕される晩、弟子たちに長いお話をされました。この後、自分が逮捕されて不正な裁判にかけられ、無実の罪で十字架に殺される事をご存知だった主は、思いのたけを込めて弟子たちに語ります。弟子たちの多くは黙って聞いていましたが、トマスともう一人の弟子フィリポは主に質問します。トマスは、「なんだかよく分からないけれども、先生がこれだけ熱心に話されているのだから、ここは黙って聞いておこう」なんていい加減な事はしないし、分からないのにわかったふりもしない、正直で誠実で勇気ある人柄のようです。

そのトマスは、復活した主イエスが現れるという決定的な場面に居合わせませんでした。どうして十二使徒でイエスを裏切ったイスカリオテのユダを除く十一人のうち、トマスだけがいなかったのか？いろいろと想像されてきました。正直で誠実なトマスは、主イエスの十字架の死がどうしても受け入れられず、混乱して皆といる事にも耐えられず、エルサレムの街を彷徨っていたのではないかと、という人もいます。そうかな、とも思いますが、確かな理由はわかりません。兎に角、トマスは甦りの主イエスに会いそこねました。それで、「私達は主に会った」という仲間たちに彼は断言します。「**あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡にいれてみなければ、また、この手をその脇腹にいれてみなければ、わたしは決して信じない。**」ここの原文は、私達の聖書の翻訳よりも、とても激しい言葉が使われています。二回でてくる「**いれてみなければ**」は、「突っ込んでみなければ」と訳した方がよい位の言葉です。「あなたたちは、悲しみと恐怖のあまりに幻を見たのだ。私達は、十字架で苦しみ抜き、息を引き取ったイエス先生を確かに見たじゃないか、ローマ兵から脇腹に槍を差し込まれて、血が噴き出すのを見たじゃないか。生きていないんだ、目を覚ませ！ 十字架から降ろした先生の亡骸だって、見ただろ？触っただろ？エルサレム中の人が見たんだぞ！復活なんかするわけじゃないじゃないか！」トマスの悲痛な気持ち、彼の絶望が伝わってくるような言葉です。

そして、このトマスの言葉に同意される方もおられると思います。かつての私もそうでした。完全に死んだ遺体が生き返るなんて、それはホラー、現実にはありえない。ましてや永遠の命へと甦るなんてあるわけがない、科学的にもありえない、そう考えるほうが筋が通って、合理的なように思えますから。

しかし、科学とは、何度も繰り返して起こる現象をよくよく観察して、その中に働く法則を導き出す事によって成り立つものでしょう。つまり、一回しか起こらない出来事は、科学では説明がつかないし、証明もできません。そして科学で証明も説明もできないことは案外と多くあります。例えば、人と人との関係もそうです。一期一会という言葉がありますが、それぞれ異なる唯一無二の存在どうしが、流れ去って二度とはめぐりこない瞬間に出会う、そんな人との出会いで、私達人間の一生は大きく左右されます。しかし、それを科学的に証明したり説明できるものではない。私達ができるのは、そういう一回限りの経験を証言する事です。

そして、永遠の命へと甦ったイエスの復活こそ、ただ一度の出来事です。ホモサピエンスがこの地球に登場してから、何億兆では足りない人々が生きて死んでいったでしょう。その中で、ただ一人だけ、甦られた方がいた。それが、イエス・キリスト、誰もがいつかは死ぬという宿命の人間世界に、超越者である神の命が突入してきた、それ以前にもそれ以後にもない唯一の出来事であるからです。天の御神は、被造物である私達を深く愛する故に、私達の外の世界からこの被造世界に突入してこられたのです。創造主と等しい子なる神・イエスキリストが被造物である人間となる、ご自身のあり方を変えてまでして、この被造世界に来られた、そして十字架に架かって死んで永遠の命に甦られた、イエス・キリストこそ、神が私達に与えてくださったただ一回限りの出来事。ですから、イエス・キリストの十字架と復活は、科学で取り扱えるものではないのです。しかし、トマスには、それが分かりません。

#### 4 信じる者となりなさい

ですが、そのようなトマスをもイエスは深く愛されました。そうして、仲間の弟子達とトマスが共にいる時に、もう一度現れてくださったのです。今度はまっすぐにトマスを目指します。そして、彼に釘の跡、槍の跡を示し、「**あなたの手を入れなさい**」とトマスの手をとって促してくださいました。ここにもイエスの弟子たち一人一人への愛を思います。

そして、主イエスは、トマスにご自身の体の傷を示して、こうおっしゃいます。「**信じない者ではなく、信じる者となりなさい**」。この言葉を聞いた時、彼の目は開けた、主イエスの十字架のみ苦しみの意味が上から降ってきて、彼の心にすんと落ちた、腑に落ちたのではないかと思います。つまり、主の十字架は自分が神を信じる者となる為であった、この自分が、信じない者、つまり儂く滅び行く者ではなく、永遠の神を信じて生きる者となるため。イエスは、壮絶な十字架の苦しみを味わわれ、死んで葬られた、神の御子が死の穢れを厭わなかった。この私が滅びない為、それだけ、それだけの為、主イエスは、父

なるみ神はここまでされた。主イエスの、神の死を超える愛は、誰あろう、この私に向かって流れてきていたのだ。トマスには、それがわかったのだと思います。突如開けたトマスの目は、見えない神の愛が自分めがけて怒濤のように流れ来るのを見た、そして疑い惑う古い自分が押し流されていく事を、身をもって知ったのでしょ。そして、「信じない者ではなく、信じる者となりなさい」という主の言葉の響きがまだ残る中に、神を信じて生きる新しいトマス、「わたしの主よ、わたしの神よ」と叫ぶトマスが立っていました。

このトマスの告白が、後の教会を作りました。甦りの主イエスが向かうのは、トマスだけではないからです。31節「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」とあるように、今日、礼拝に招かれて聖書の言葉を聞く一人一人に、主イエスは呼びかけています。「信じない者ではなく、信じる者となりなさい」。

## 5 見ないで信じる信仰へと成長する

そして、信仰を与えられたトマスに主イエスは次のように続けます。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる者は幸いである。」復活されたイエスを自分の目で見て納得し受け入れて信じる信仰は、信仰の初心者、とイエスは仰っているようです。実際にイエスを目で見るとは出来ない、しかし、「十字架に架けられたイエスは、三日目に甦り、今も確かに生きて働いておられる」と信じる信仰が与えられた者はもっと幸いだ！とおっしゃり、トマスを励ましているようですし、後の教会を祝福しているようでもあります。

現代を生きる私達も主イエスをこの目で見る事も触る事もできません。この点でも聖書は現実的です。見えもしない者を見た、だから、主イエスは今も生きて働いているのだ、なんて事は、どこにも書いていません。では、なぜ、復活の主イエスは見えないのに、触れないのに、私達は信じる事ができるのでしょうか？

それも今日の聖書に書いてあります。疑い惑い仲間のもとを離れたトマスでしたが、結局は群れに戻って来ました。そこで主イエスと出会う事ができました。信じる者達の群れの一員として、現代でいえば教会の一員として、信仰者の真ん中にたつてくださる主イエスを知り、見えない主が、確かに生きて働いておられるからです。だから、確信を持ってないままでも、信仰生活を続けていけば、必ずイエス・キリストとの出会いがあります。人生の苦しい時、誰も助けを与えてくれないというピンチに陥った時、何かに賭けるような気持ちで「イエス様、信仰の薄い私を助けてください！」と祈ることを学びます。その時、以前に聞いた、でも、心に残りもしなかった聖書の言葉が、不意に頭に浮かんで来て、力を与えられ、助けられる、偶然かもしれない、いや、違う、聖書の言葉が、この自分に向かってきている、そうとしか言えないような出来事を経験し続けます。そのようにして、礼拝で、日々の生活でキリスト・イエスは私達と出会ってくださいます。だから、主イエスは「現状に自己満足するのではなくて、私を求め続けなさい」とトマスを、私達を励ましておられるようです。

今日はこの後、木村悠真さんの洗礼式を行います。洗礼は、神を信じない自分を捨て、神を信じる者として生まれ変わる事。ですが、それで終わりではありません。主イエスの「信じる者になりなさい」という言葉を厳密に訳せば、「信じる者になり続けなさい」です。私達の信仰は、いつも道途中、ゴールは天国に召される時。ですが、気落ちすることはありません。一回限りの出来事が次々と起こる冒険の旅、主イエスがともに行ってください冒険旅行なのですから。天の御国を目指す冒険旅行。トマスはその冒険旅行に踏み出しました。2021年のイースター礼拝、私達もまた、冒険旅行の新しい一歩を踏み出すことができますように、祈り願っています。